

佐藤学・齋藤智哉先生国頭村学校訪問記録

文責 宮城 尚志

国頭学びの会ゆい事務局

1. 5月24日 午前8:40～10:10（1・2校時）

国頭村立辺土名小学校視察



24日午前中の1・2校時は、国頭中学校近隣の辺土名小学校の授業を視察。全クラスを視察してもらいました。特に辺土名小学校の高学年の子ども達が、「学びの共同体」の理念に取り組み1年目で、しかも新学期始まってまだ間もないこの時期に、何の違和感もなくしっとりと「学び合う」姿に大変感激していました。

低学年においては、佐藤先生より「低学年の授業経営そのものがむつかしいものである。」と、後の国頭中学校での講演会でもアドバイスを頂きました。講演会終了後も村内の小学校の教師たちの頑張りがあから、中学校での取り組みが生かされること、子ども達が身に付けた「学び」の力が、校種を超えて引き継がれること等、大変うれしく先生方の自信につながる助言を頂きました。

【 身を乗り出して訊き合う・支え合う 】



「訊き合う・支え合う」
分らない者たちが卑屈になることもなく。教える者が見下すこともなく、何の違和感もなくしっとりと「学び合う学び」が遂行される。互いに支え合うが「当たり前」化されて実践されていることが何よりうれしい。



辺土名小学校の先生方大変お疲れ様でした。佐藤先生の訪問と聞いて、少なからず緊張したとは思いますが、素晴らしい学校訪問になったと佐藤先生、齋藤先生の講評でした。まだ改革が始まって1年です、授業経営以外にも学校にはさまざまな難しい課題、超えていかなければならない課題があります。「一人残らず…」すべての教師すべての子ども達が、誰一人とり残されることなく、豊かで楽しい学校生活がおくれることの実現を目指し、学校、保護者、地域、行政が一体となって「学びの共同体」の理念の実現に向かって行けたらと節に願うところです。

本日は、ほんとにお疲れさんでした。感謝に尽きます。



国頭学びの会ゆい

2. 5月24日 午前10:40~12:20 (3・4校時)

国頭村立国頭中学校視察

〔1年A組〕 家庭科



1年A組 「献立づくりと食品の選択」

今年4月からの新任の教師である。教材作りに課題設定と教師の汗がうかがえる。生徒たちは食品カードを手に取り、栄養バランスを考えながら献立づくりを楽しく学んでいく、生徒の活動意欲を高め、発想力や思考力を促す。しかも楽しくである。4月に赴任して初めて「学び」の授業を見てどう思っただろうか。4月当初より校内で互見授業が交わされ、驚きや悩みを共有しながら今日を迎えている。素晴らしい。素直に感謝である。

〔1年B組〕 社会



1年B組 「温暖な土地に暮らす人々」

こちら、4月からの新任である。写真資料を基に学び合いを促す。生徒たちはすぐに食いつき自分の気づきを語り、相手の気づきにうなずく。「分からないことは訊く」「訊かれたら寄り添う」当たり前のように目の前で繰り広げられる。机の高さがそろい、隙間なくくっつけられ、グループの中央が有効に使われている。この授業展開に心とむのは、生徒と保護者である。

〔2年B組〕 英語



2年B組 「Purogram 3-1.....」

今年初任者として赴任である。大学を卒業してまだ間もない。在学中には、「赴任した学校では、こんな授業をやりたい。」とか、いろいろ自分の実践したい授業形態があったと思うが、ここでは割り切って「学び合う学び」の授業に挑戦である。しかし、教師の話し方や、仕草に全く違和感ないのが不思議である。生徒が安心して授業に参加している。一番素敵なのは教師の笑顔である。

〔3年A組〕 保健体育



3年A組 「健康な生活『休養と健康』」

国頭中が「学び」に挑戦し始めた当初からの教師である。普段は生徒指導担当で常に全校生徒、全職員とのコミュニケーションを気にかけて、学校経営に参与してくれている。また、生徒指導においても、「寄り添う」を大切に「学びの共同体」の理念を淡々と実践している。本日の授業も、プロ野球の一流選手の休養や体調管理について課題として取り上げた。まさに生徒にとって「学びたい」テーマである。

【 教師が変わる→授業が変わる→生徒が変わる→教室が変わる→学校が変わる→保護者が変わる→地域が変わる】



3・4校時の各教室における公開授業にも多くの県内外の先生方や保護者、地域の方々が参観に訪れてくれた。

うれしいの一言である。一時、学校が厳しい状況の中では、やはり授業参観と言えども、保護者や地域の方の参観には、なにかしら遠慮している空気が感じられた。現在は、頑張る生徒、頑張る先生、頑張る学校をぜひ励ましておきたいなどの思いからか？とにかくPTA作業にせよ授業参観にせよ、国頭中の保護者が変わりつつあることを実感している。生徒達もこれほど多くの参観者に見られているが、いつも通りの授業風景を見せてくれた。

〔5 校時提案授業〕 3 年A組 国語

授業者：佐藤 繁

教 材：「月夜の砂浜」 中原中也



県内外の先生方 150 名以上が参観した。うれしいことは国頭地区外の島尻地区や、遠くは宮古島からの参加があった。国頭で「学びの共同体」の名を掲げ中学校が3年目、小学校が2年目である。少しずつその取り組みが、国頭地区や県内の学校、先生方に知られてきた。

近年「学び」という言葉が流行するかのようになり、県内のあちこちの学校でも「学びの授業」が実践されている。一言で「学び」と言っても、定義や理念に解釈の違いや授業の方法論に形式や曖昧さがある。

私たち国頭村は、佐藤学先生が提唱する「学びの共同体」の哲学や理念を基とする「学び合う学び」の実践と、一人残らずすべての児童生徒の「学び」の保証を目指す取り組みである。



3 年A組の仲間たちが公開授業で頑張る。いつもの「学び合い」を素直に出せばいい。私も教師たちもそう願う。簡単に「いつものように」とは言うが、これだけの大勢の中、しかも体育館という環境の中では簡単ではない。今日は国頭中学校の代表として 3 年A組の仲間達と佐藤繁先生が頑張っている。テーマをグループにおろすとぼそぼそと「学び」が交わされた。国頭中学校の2カ年の頑張りの成果である。決して「すごい授業」ではない、「しっとり、淡々と静かに」生徒の息遣いが交わされる。参観者はどう思っただろう？

「完成された授業などあるはずがない。あってはならない。」「失敗」と言う言葉もない！大切にしたいのは、この仲間達と教師で、今できることを参観者に誠意をもって見てもらうことだ。この提案授業から参観者の「学び」は計り知れない。なぜ「語れる」、なぜ「訊き合える」、なぜ「寄り添える」、なぜ「卑屈にならない」、生徒たちは日々の授業から、互いに「学び合い」「分かり合う」ことの喜びを知っている事実の現れではないだろうか。



【 学びの質を探る 】

学びの授業研究では、小グループにした時に、担当の教師が張り付いて、ぼそぼそと交わされる「対話」の質を探る。授業者は全体を見渡し、ケアを要する生徒以外には余り関わらないように心がけている。教師が立ち歩くと生徒の依存が教師に向けられてしまい生徒互いの「学び合い」が途切れてしまうことがある。また、ぼそぼそとした学び合いを一教師で把握するのは難しい。

【 校内研修の公開 】

公開授業後その場で日常の校内研修の様子を公開する。国頭中学校の先生方がどのような視点で授業を観察し、どのようなことを語り合い、互いの授業の質を高め合い同僚性の構築を図っているのか。

赴任してまだ2カ月の教師もいるが、しっかり学びの視点で協議会に参加している。ただ頑張っているという言葉では表現しにくい。この協議会に居合わせたすべての国頭中学校の教師たちに敬意を表したい。ほんとにご苦労さん。そして心底ありがとう。感謝に尽きます。



(1) 辺土名小学校訪問手記

沖縄に来て初めて訪問したのは辺土名小学校でした。子どもたちが「キュッ」とくっついているのが全体の印象です。子ども同士の距離の近さは、教師との距離の近さでもあると思いました。教師は常に子どもに近い場所にいる。しかし不必要に距離を詰めすぎない。そして、子どもたちが困っていれば、教師はすぐに援助をする。こんな教師のかかわりかたがどの教室にもある。だからこそ、子どもたちは、身を寄せ合うようにお互いの存在を受け止めながら、丁寧に学んでいたのだと思います。子どもは教師をモデルにしている(＝モデリング)ことに改めて気づくだけでなく、子どもの存在の仕方は教師の存在の仕方を映し出す鏡であることを改めて学ぶことが出来ました。



4年生の教室のある場面を機に、気づいたことがあります。辺土名小の子どもたちは、わからない時の表情がものすごく良いのです。「わからない」ことが子どもたちの表情に現れているのですが、苦痛の表情ではない。誰かの助けを待っている表情でもない。「わからない」状況を一旦は自分で受け止め、でも、このわからなさを乗り越えたら新しく楽しい世界があるんだろうな…という、どこか楽しげな表情をしているのです。この表情に気づいたことで、辺土名の子どもたちは、学ぶことの楽しさ、学びの快樂を知っているなと思いました。



そして、やはり5年生の算数に触れないわけにはいきません。黒板から見て右前のグループは圧巻でした。私は教室に入っすぐ、このグループが気になりました。どこか視線の定まらない眼鏡の男の子。おとなしいだけでなく、他の3人と妙な距離感がある眼鏡の女の子。眼鏡の男の子に隣の青Tシャツの女の子が身を寄せながら丁寧に関わっていました。しばらく経つと、その男の子は、黒板を指でさしながら、目の前の黄色Tシャツの男の子に話し始めたのです。虫食いの割り算の筆算について、自分の考えを伝え始めたのです。さらに、次の時間の理科では、今度は眼鏡の男の子が、青Tシャツの女の子の教科書(ノート?)を使って、その女の子に話をしていました。このグループの子どもたちの事情を宮城先生から伺って本当に驚きました。この4人のあいだには、まさに「ケアレケアされる関係」が成立していました。好例です。弱いもの同士が支え合うことの意味がわかった気がします。つまり、弱い部分でつながってネガティブな部分を増幅させるのではなく、お互いの足りない部分を補い合いながら希望を見いだしたとき、初めてともに居ることに意味が生まれるのだと思いました。この子どもたちにとって、学びは希望であり光です。



辺土名小学校は取り組みをはじめて間もないと伺いました。学びの課題の質をはじめとして、個別の課題は尽きないと思いますが、ぜひ焦らずに丁寧に取り組みを継続してもらえたらと思います。

(2) 国頭中学校訪問手記

私にとって初めて訪問した沖縄の中学校が国頭中学校となりました。衝撃の出会いだったと言っても過言ではありません。お世辞でも何でも無く、全てがあまりに自然であることに驚きました。学びの共同体の理念が、当たり前で当然のこととして、どの教室でも粛々に行われているのです。そこに作為的なものを全く感じない、と表現したら良いのでしょうか。小橋川教育長はもとより、神元校長や宮城主事をはじめ多くの先生方の尽力と、地道で丁寧な積み重ねが、いまの国頭中学校の姿を生み出しているのだと思いました。全ての授業と先生について感想を述べたいところですが、今回は3人の先生について感想を述べさせていただきたいと思います。



英語の比屋根先生が初任者ということには本当に驚きました。コの字からグループに移ったときに、教室の真ん中がガラんとあいてしまいました。比屋根先生は教室の真ん中がぽっかりと空いてしまった空間性に違和感を感じたのでしょう。すぐに後ろのグループを空いた場所へ移動するように促していました。空間をデザインする感覚は、教師の身体性がもたになっています。一斉授業の教室空間に慣れていると、コの字やグループにするとということだけに違和感を感じてしまい、子どもたちが学び合う場そのものへの意識や感覚が薄れてしまいがちです。比屋根先生の身体感覚は決して特別なものではありません。しかし、初任者ということで、教師として一斉授業の教室空間に慣れきっていなかった感覚が、あの判断に結びついたのかもしれませんが、ぜひ、学校全体で共有したい感覚だと思いました。

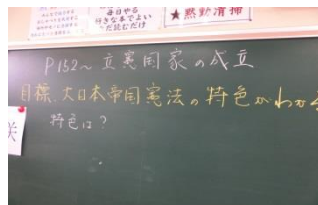


保体の比嘉先生のチャレンジにも学ぶことがありました。とりわけ、ジャンプの課題の設定についてです。デザイン上では、ダルビッシュの調整法（体調管理）が課題として設定されていましたが、ダルビッシュ本人の調整法が定まらないということで、前日見ていたスポーツニュースをヒントに「日ハム・大谷の二刀流の調整方法を考える」に切り替えたとのことでした。前代未聞の二刀流挑戦ですから調整法が確立されていない（＝答えがない）わけで、さらに生徒一人ひとりが「大谷のトレーナーになったとしたら」という立場を想定できるのが絶妙です。これはワクワクします。さらには偶然の産物かもしれませんが、日ハムの二軍キャンプは国頭村だったわけですから、子どもたちにとっては身近な対象でもありました。実際に、比嘉先生が「難しいかな〜？」と言いながら大谷選手の写真を1枚見せた段階で、ある女の子は「あ、翔平だ」とつぶやいていました。今回の課題は、身近な対象であり、なおかつ多様な考え方が求められるものだったわけです。ジャンプの課題をつくるコツみたいなものは、偶然の状況でつかめるのかもしれませんが、たまたま上手くいったときの自分の思考のプロセスや感覚を、振り返って意識化しておく、と必ずや次にいかされると思います。そして、体育の先生が果敢にチャレンジしている姿は、国頭中の改革の深まりを示しているように思いました。



渡慶次先生の歴史の授業からも多くのことを学びました。資料（史料）が子どもをつなぐモノ（＝媒介）であり、学びの対象として、しっかりと役割を果たしているのです。おそらく渡慶次先生のスタイルなのかもしれませんが

せんが、わかったことを資料そのもの書き込むことは、大変良い学び方だと思います（大日本帝国憲法の口語訳や、第一回衆議院議員総選挙における有権者の割合のグラフなど）。資料などからわかったことをホワイトボードに書き込むスタイルを見ることは多いです。しかし、資料に直接書くか、別のもの（ホワイトボードやプリント）に書くかは、ほんの僅かな違いですが、子どもたちの学びの質に歴然とした違いを生み出すことがわかりました。また、途中で、先生があるグループに、以前の授業で使った資料だと思われる風刺画（書き込みあり）を渡していました。これも重要なかわりです。以前使った資料などは、つい破棄することもあるかと思います。しかし、子どもたちにとっては自分たちの学びの履歴を踏まえることで、かつて学んだこととその時学んでいることが確実につながるのだと思います。このように、適切なタイミングで各グループに資料を戻せるのは、先生が丁寧に的確にグループの学びの状況を把握しているからだと思います。渡慶次先生のもう一つの特徴は、グループに関わるときのポジショニングです。つねにグループ全体を把握できる位置にいます。言葉にしてみると当たり前のように思えてしまいが、いざ実行すると、ものすごく難しいことです。



2年B組の英語の時間に、ある生徒の机が残り3人から離れていたグループがあったのですが、スッと近づいて机をくっつけていた神元校長先生の姿がありました。この細やかな配慮が、国頭中学校のどの教室でも当たり前のことが当然のように行われていることの源泉だと思います。子どもが学び合い、教師が学び合い、学校全体が育っている姿を目にすることができて、私もたくさん学ぶことができました。本当にありがとうございました。また、ぜひ再訪することができればと思います。

「学びの共同体」スーパーバイザー 齋藤智哉 国学院大学准教授

(3) 提案授業についての講評メモ (DVDより)



【生徒たちが詩を味わっている。】

- ◎ 言葉を大事にしている。分からない言葉を調べる行為があった。→「袂」
言葉との出会いを大切にしている→言葉の意味を調べる必然性の追求があった。
自分にとってこの詩を味わうために意味を調べる必要があるんだ！→「詩を味わう」につながるちょっとした違いから詩を味わう→「波」「浪」「浜辺」「波打ち際」
- ◎ 言葉を大事にして詩を味わう。生徒各々の詩の「味わい」「創造」を大事にしている。
「冷やかし」がない → 生徒それぞれの考えや思いが大切にされている。認められている。

【アドバイス】 音読について

- ▲ 2回目の詩が出たときにもう一度音読を入れ、詩との「出会い直し」を意図的に入れると新たな気づきや、思いが起こったのではないだろうか。

【改革への道】 ゆい事務局

教師が変われば授業が変わる→ 授業が変われば生徒が変わる→ 生徒が変われば教室が変わる
教室が変われば学校が変わる→ 学校が変われば保護者が変わる→ 保護者が変われば地域が変わる。